

平成30年度 第1回羽島市生涯学習都市推進会議（会議要旨）

日 時	平成30年5月22日（火）午後1時25分～午後3時40分
場 所	羽島市役所本庁4階 第1会議室
出 席 者	<p>出席者23人</p> <p>松井聡会長（市長）、坂本光男委員、牧野貞臣委員、牧野理絵委員、加藤やす子委員、小森博昭委員、宮田敏子委員、高砂房子委員、鶴飼紀子委員、小川和彦委員、大橋佳政委員、不破祥公委員、加藤尚子委員、近藤かよ子委員、近藤栄美子委員、成原嘉彦委員（副市長）、伏屋敬介委員（教育長）、國枝篤志委員（市長室長）、古川裕之委員（企画部長）、番勝彦委員（環境部長）、石黒恒雄委員（健福祉部長）、永田久男委員（産業振興部長） 笹野順一委員、（事務局）</p> <p>山内勝宣事務局長、北垣圭三市民協働課長、横山郁代子育て・健幸課長、酒井茂生涯学習課長、箕浦勝博スポーツ推進課長、諏訪公彦図書館長、大野悦子生涯学習課長補佐、大橋寛子同課係長、高井杏輔同課主事</p>
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 25名の委員の内、23名の出席により会議の成立を報告 1 委嘱書交付 机上交付 2 会長あいさつ <ul style="list-style-type: none"> ・ 新たに4名の方に委員をお願いする。 ・ 平成30年2月に就任した柴橋岐阜市長と、行政課題について話し合いの場をもった。1つは、岐阜市南部の最大の政治的課題である次期ごみ処理施設の建設において、その円滑な事業推進についてである。もう1つは連携中枢都市構想についてである。地域連携は自治体同士が共通のメリットに向けてつながるという理念であり、生涯学習の「つなぐ」に通じるものがある。生涯学習の裾野は非常に広いが、「三世代をつなぐ」「次世代をつなぐ」の2つのキーワードに集約される。 ・ 教育面において、岐阜市は「子育て・教育立市」を掲げ、その推進を図っているが、当市の教育において、とりわけ、学校教育での児童へのipadの普及率や、全小中学校のWi-Fi環境の整備、英語指導の充実、県内初の義務教育学校の設置など、岐阜市に劣るものではないと考えている。 ・ 生涯にわたり自分のふるさとを自慢できること、将来就職して戻ってきたいと思うモチベーションを途絶えさせないためには、ふるさとを知ることが大切である。単独の自治体だけではグローバルな知識や精神は養えないので、広域エリアにおけるふるさと学習が必要だと提案した。より広い目で行政や生涯学習の根を広げていくことが次代につながっていく方策であると確信する。ない

ものねだりではなく、あるもの探し、よいもの見つけで地域おこしを展開していかねばならない。

3 協議事項

(1) 平成30年度羽島市生涯学習都市推進会議関連事業計画（案）

資料に基づき生涯学習課長、図書館長、スポーツ推進課長より説明

(委員) 放課後子ども教室等で、小学校と特別支援学校の子どものつながりはあるか。

(事務局) 放課後子ども教室は、学校ごとの申し込みとしており、この事業で特別支援学校の児童との交流は考えていなかった。

(会長) 本市では、障がいのある子どもの幼児期からの支援に力を入れている。市立西部幼稚園での職員の増員や、利用しやすいよう施設の改善を行い、共生社会の実現を目指すために、インクルーシブ教育を行っている。幼稚園を卒園後、高校まで県立羽島特別支援学校で学ぶことができる。特別支援学校と地域とのつながりとしては、高等部の生徒が、定期的にかフェを開いたり、作品の展示即売を行ったりしている。今後、垣根のないバリアフリーでの形の交流に向けて改善していきたい。

(委員) 昨今、横のつながりが希薄であると感じる。事業説明の中で、それぞれの事業が「つなげる」でまとめられていたが、主体は市民なので「つなげる」ではなく「つながる」までいけるといい。コミュニティ・スクールを中心とした縦と横のつながりが生まれるとよい。

(会長) 現状では、まだつながる段階までいっていない。つなげる努力をしながら、市民が主体的につながるところまでもっていききたい。

(委員) 女性も仕事をする時代である。平日に会議等があっても参加できない人が多い。仕事や子育てに時間をとられている保護者にとって、魅力ある取組を考案して、保護者同士がつながるきっかけをつくってほしい。

(委員) 地域におけるつながりとして、正木町には四五行事がある。行事がマンネリ化していると言われるが、これは決して悪いことではないと思う。継続していくことが非常に重要である。なぜなら、一つ一つの事業を行うこと自体が目的ではなく、事業は目的を達成するための手段だからである。

(委員) 放課後子ども教室の参加者が少ない。良い取組なのに残念である。学校ではできない体験もできることがよい。学校としても何か協力をきたらと思う。保護者同士の直接のつながりが事業を通して増えればいい。

(会長) まさに義務教育学校は小学校と中学校をつないでいる。

(委員) 長期休暇等の公共施設の利用について、勉強で図書館の自習室を利用する学生は多いが、本を読むという目的での図書館利用者が少ないように思う。1つの場に、違う地域の子を集め交流することで、横のつながりをつ

ることができる。イベント以外にも高校生までのニーズを捉え、大切にしていってほしい。

また、学校でのタブレット使用は学習の補助的なものである。PTAでも紙ではなくインターネットから情報を得る人が多い。中学生向けの市の歴史的名所や財産、各関係機関の仕事内容等について知れるようなサイトがあっても良いかもしれない。

(委員) 市では、妊娠期から子育て期の切れ目のない子育て支援を目指して、4月から子育て支援課と健幸推進課を統合した。

(委員) コミュニティ・スクールも2年目に入った。学校運営協議会の質を高めるため、コーディネーター等の充実を図り、11～12月に成果を発表したいと考えている。

(委員) 産まれた時から生涯学習は始まる。周りの環境が生涯学習の素地をつくる。子どもの頃の経験は大人になってもつながっていく。子どものうちは家の中でスマホゲームをやるのではなく、外に出て様々な体験をすべきである。

(委員) 地域全体での行事については青少年がリーダーとなり、中学生が模擬店を行い、大人も子どもも楽しんでやっている。小熊町では新春凧揚げ大会を開催しているが、保護者と子どもがいっしょになって作品づくりから取り組んでいる。防災では、地震体験車や消防の水出し等、子どもたちも喜んで体験している。

(会長) 防災は竹鼻南地区が先進だが、近年の小熊の取組にも感謝している。

(委員) 盆踊りも代わりばえしないと言われるが、毎年開催できることが楽しみである。小学校の先生からパトロールや草刈等のボランティアの要望をいただいているので、今年はそれに力を入れていく。美濃菊も学校と協力して育てていきたい。

(会長) 世代をつなぐ美濃菊の継承活動に感謝している。

(委員) 老人クラブの活動で、人と関わることは好きだが、そこに行く手段が無く不便を感じている人が多いのではないか。伝統を重んじて活動をつなげてほしいが、自分が経験していないとつなげられないので、経験することが必要だと思う。

(会長) 高齢者が出かけたと思うような動機付けは地域の役目であり、行けるように手段をつくるのが行政の仕事である。

(委員) 竹鼻町では高齢化が進んでいる。高齢者は興味のあることには集まるが、横のつながりをつくるのが難しい。子どもは減っているが、夏休みの子ども講座には集まる。個々には集まれるが、それをつなげるとなると難しさを感じる。

(会長) 竹鼻まつりを羽島市全体の宝として、校区にとらわれずお祭りやお囃子の参加の呼びかけをしたところ、人が飛躍的に集まった。

(委員) 放課後子ども教室でもお囃子体験を取り入れている。竹鼻まつりのお囃子等、他の地域から参加したいという子どもが増えている。町内だけでの山車等の保存が難しくなっているので、岐阜県の宝という前に羽島市の宝としてどう維持していくのがよいか、大きな課題だと思う。企業や地域で協力して後世につないでいくのが私たちの務めだと思っている。

(会長) 囃子方について、男性限定だったものを、女性も参加できるようにしたり、お囃子の音楽をリメイクしたりすることで復興の兆しを見せている。

県、市指定の文化財の保護・調査・継承の組織づくりもお願いしている。限られた予算の中で、どこの何を優先するのか、民主的に決めていただく必要がある。

(委員) 6月7日から岐阜メモリアルセンターで、第18回アジアジュニア陸上競技選手権大会が開かれる。日本初であり、選手村が羽島市内のホテルとなるスリランカの選手も参加予定のため、大会が終わった後、小学校の児童と交流させてほしい。

(委員) 羽島市は、スリランカ国のホストタウンである。小熊小学校と福寿小学校が応援に行く。足近小学校は応援のための横断幕を作る。

(委員) 子育てを通して、地域とつながる実感をもつことができた。子育てから手が離れた今、今後地域とどうつながるといいのかと考えるようになった。身体が動くうちはいろいろなところに行って学ぶことが大切である。年を重ねて身体が不自由になり発信したくてもできなかつたり、若い時のように動けなくなつたりする。

(委員) 先人から受けたものを、後世にさらに良くしてつないでいくことが私たちの生きている役目だと思う。人権とは、生まれてよかったと実感できることである。誰かの役に立つことや、社会の役に立てることが生きがいにつながる。毎年人権作文コンクールの審査に携わるが、児童・生徒一人ひとりが真剣に人権について考えているのがわかり、感性が豊かに育っていると感じる。自己肯定感が大切である。

子ども食堂に携わっており、この活動が、共働きで家庭と仕事で忙しい保護者の支えになっていると思う。また一人暮らしの高齢者にも好評で、子ども食堂が世代間交流の場となっていると感じる。

(委員) 図書館において、本屋と連携し、本屋大賞を獲得した本を紹介する機会を設けてはどうか。市民の読書欲を増進させられるのではないかと。

(事務局) 図書館では、貸し出しランキングを公表したり、市公式ホームページで話題の本を取り上げたり、特設コーナーを設けたりしている。

(会長) 他市の事例も参考にしていきたい。

(委員) まつりの山車は、各地区内での保存が難しいと感じる。

(会長) 保存、継承について、地域と行政が一体となって進められるように努める。

(委員) 先日、立命館アジア太平洋大学の出口学長の話聞いた。日本の少子高齢化は問題である。現代の若者に、未来へのイメージを尋ねると「暗い」と答える。なぜなら、今までは複数の若者で高齢者1人を支えてきたが、今後は1対1で支えなければならないためとある。しかし、若者が高齢者を支える動物は、人間以外にいない。そのため、この考え方は間違っている。皆が皆で支えあっていくのが社会であり、究極は年齢にとらわれず、皆がつながっていくことである。

市民と行政のつながりは年々変化してきており、現在はお互いに情報を共有し、意見を出し合い、新しい政策をともにつくっていく市民協働の時代である。市長は市民第一主義を掲げており、市民との対話を重要視している。タウンミーティングや事業仕分けに取り組んでいる。また、寄り合いワークショップを正木町で始めた。市民でできること、行政でしかできないことを確認しながら、お互いに力を尽くしていくという政策が始まっている。

(会長) 共生社会の実現が大きなテーマであり、生涯学習を母体とした形で羽島市に根付くことを期待する。

4 その他

(1) 切れ目のない子育て支援について

—「子育て相談センター 羽っぴい」の開設を通して—
資料に基づき子育て・健幸課長より説明

5 閉会

(事務局) 皆様からいただいたご意見を参考に、羽島市の生涯学習をさらに推進していきたい。今後も委員の皆様のご協力・ご助言をお願いします。